山春の墓も御像も小さけれ　　開山に桃の獻花や松ヶ岡　眉仙

五代、用堂尼の御像。用堂尼は後醍醐天皇の皇女、護良親王の御姉宮、

爐塞ぎし夕にやおはす御面輪

二十代、天秀尼の像。秀頼公の娘

胡粉はげて御頬のあたり春寒し

春寒のよきみめ似せし御像かな　雨村

今の東慶寺の建物の一つは御殿と言はれて、代々の尼の起臥された部

屋であつたとの事であるが、これはもと駿河大納言が天秀尼と親交あのつたところから、其邸宅を寄進されたものであるさうな。

萱刈れば春の山なり棕梠一木

東慶寺のうしろの山の卽景である。滿山唯枯れた萱に蔽はれてゐたのを綺麗に刈り取つたあとには一本の棕梠が目立つて見えるのである。

○上州高崎の俳句會に鳴雪翁と共に列席した。私は取敢ず大信寺に駿河大納言の墓を弔うた。東慶寺の御殿を思ひ合せたのであつた。人も知る如く、三代將軍家光と世嗣を爭うて、春日の局の忠節となり、宇

都宮釣天井の謀叛となり、遂に此地で自盡して徳川の天下は初めて安定したのである。夫の天秀尼とは單純な交でなく大納言の方で懸想してゐたといふやうな戯曲的な話もあるさうな。墓は蕭條として天を摩するやうな老松の下に在る。鳴雪翁は外套を脱し帽子を取つて禮拜された。翁としては徳川將軍の連枝に對する敬禮であらう。私は翁に對するおつき合ひから矢張外套と帽子とを取つて敬禮した。

さて高崎の俳句會は蛸魚、雨工、鬼城其他數十氏の會合で盛であつた。さうして今後春雨會の名の下に月々會合を催すとの事であつた。

見受けるところ五十にも近いかと思はれる鬼城君とはホトトギス紙

上では十數年來の交友であるが、逢ふのは初めてゞあつた。同君は耳が遠いので其が爲に世に對する怖れもあれば憤りもあるらしい。平生同君は殆ど何の會合にも出席せぬとの事であつたが、我等との會合にも、聞えぬ耳を強ひて欲てようともせず、兩拳を膝に乘せて肩を縮めて隅の方に小さくなつてゐた。

「何を言はれるかも知れん、險難で仕方が無い。」

「表を歩くにしても軒の下の方を小さくなつて歩く。」

「誰も人の居ない山か何かに行つて住まつたら、どんなに氣樂か判らない。」

「其も生活に困らないなら何でもない。生活に困らないのなら耳の遠いの位何でもない。」

是等は同君の口から洩れた言葉であつた。併し天は幸である。社會的に不幸な氏も文藝的には幸である。耳の遠いといふ事が同氏の文章にも俳句にも格別の色彩を添へ彈力を與へるのである。

百姓に上る雲雀や夜明けたり　鬼城

私が天に取つた句は斯ういふ句であつた。措字は少々違つてゐたかも知れぬが斯ういふ意味の句であつた。席上の他の句に比べて嶄然頭角を現はしてゐた。打ち並んだ中で一番見すぼらしい氏の風采には一番

光彩があるやうに私には思へた。

尙これは獨り高崎の俳句會のみならず、他の地方の俳句會にも私は一個の希望を陳べて置く。それは私が出席した以上は宗匠らしい取扱を與へずに私も矢張諸君等と共に同じ作句者の一人として平等に取扱はれたいことである。俳話の必要があれば俳話もしようし、揮毫の必要があれば惡筆を揮ひもしようが、兎に角句作は諸君と共にし選句も諸君と共にし度いのである。一緒に膝を抱いて句作し一緒に互選を試むるところに、俳句會の多くの興味はあるのである。獨り興味ばかりでなく相互に多少の利益もあると信じられるのである。

さて當日の句は極めて少かつたが其の一二。

移されて淋しき藤の咲きにけり

これは先般前橋の公園で或所から移されたといふ藤を見た時、其藤は此處に運ばれる爲に散々に枝を剪られたといふ話を聞いて何となく心に染みた。其處で藤といふ題を見ると私は一番に其藤を思ひ出して此句を作つたのであつた。鳴雪翁は此句を天に選ばれた。其程の句とは思はぬけれども暫くぶりに翁と句作を共にして其選に入つたことを愉快に思つた。

佳賓あれば開く雨戸や藤の花

この句は翁の一顧をも得なかつたのであるが、自分では前句よりも稍勝つてゐるかと思ふ。同じく前橋の貴賓館などを思ひ浮べたのである。暗い善い座敷を想像すると言つた水巴君の言は私の首肯するところである。

雲雀野の陰晴に箱根峙てり

天氣の陰晴につけて眼の前に箱根の峙つてゐる景色は國府津から小田原邊に行くに從つていつも強く感ずるところである。雨村君の話に平塚程雀雲の多いところは無いと。此句は其二つの觀念の結びつきから出來上つたのである。平塚あたりでは箱根は稍遠くて小田原邊から之

を望んだのとは少し感じが違ふけれども其でも戸塚、大船邊に比べれば尙遙に近景である。況や此句は必ずしも平塚と限つたことは無い。箱根近くの平野とすれば何處でもよいのである。

尙私は大信寺に至る途上高崎の町に澤山の種物屋を見た。車上から見たので、熟視するいとまは無かつたが、其でも強い印象を受けた。其儘をスケッチしたやうな句一つ。

紺暖簾に赤大根や種物屋

○それから後水巴君の家で種物十句を作つた時、私は高崎の町ばかり

を考へた。

眼を射しは隱元豆や種物屋

物種の中に隱元和尙かな

狹き町の兩側に在り種物屋

邯鄲の市に在りけり種物屋

其から濱町邊に住まふ人の上を考へて二句を得た。

物種を買ひに行きし妹を待つ間かな

物種買ひぬ早苗賣の來る思ひ

○雨村庵にては屢句作した。其一二。

遲き日を俄に亂す用事かな

斯の如く日永人なる夫婦かな

春の夜を更かし歸りてさす戸かな

物に倦みて灯に向ふ顏や夜半の春

水たまりに落ちて雨降る椿かな

○高松寺は西御門の谷間に在る。恰も彼岸の日其處でも一回句會があつた。

谷窪に鉦が鳴るなり彼岸寺

谺する鷄の聲あり彼岸寺

高松寺十句のうち。

この谷の遲日におはす庵主かな

水仙にたぐひたけたり蕗の薹

槇に映る梅の白さよ夕間暮

白梅も見えわかずなりて暮れにけり

春の人暮るゝを知らず庭に在り

庭暮れて春の月ある空廣し

これといふ際立つた句も無いけれど、實景であるために捨て難いのである。

○東京市外柏木の原月舟君の宅の俳句會に列席。運座。

打水をする僕出でぬ若楓

自分は客となつて或家に在る時、打水をする爲に手桶を持つた其家の僕が若楓の蔭から出て來たのである。

箏の前に人ゐずなりぬ若楓

自分の家としてもよい。人の家としてもよい。孰れにしても相當に豐

な暮しをして居る家を想像する。たとへば西の對とでもいふ所を母屋から打ち見たやうな場合である。先に見た時には箏の前に人が居たが、今見るともう人はゐず、唯箏のみが置かれたまゝにしてある、庭には若楓が潔い初夏らしい色をして居るといふのである。

短夜や時間定めず貨物汽車

これで私は貨物汽車を僅の間に二回使つたことになる。此句も鎌倉居住後の實驗である。横須賀線はもう十二時頃を以て終列車とするのであるが、其後になつて時々汽車の音がする。其はどうしたことかと思ふと貨車が通るのである。而も時間は極まつてゐない。時によつて違

ふのである。

一間毎に蚊帳釣る客や竹の宿

夏になると鎌倉の草庵にも相當に來客のあることがある。さういふ時には間毎に蚊帳を釣るのである。竹の宿としたのは一景を點じたといふに過ぎぬ。

翡翠去つて人船繋ぐ杭かな

今迄は森閑として翡翠がとまつてゐたが其翡翠の去つたあとへ一隻の舟が來て、人が其杭に舟を繋ぐといふのである。

福を待つ床の置物や夏座敷

これは「福」といふ題を課したのであつた。床の置物は平生唯置物としてのみ眺めてをるが、ふと氣がついて見ると其中には福をもとめる意味のものなどがある。さういふ福を待つ爲の置物などを置いて取り澄ましてゐる夏座敷には一つのユーモアが漂うてをる。

江戸亡ぶ俎に在り初鰹

昔の江戸が亡ぶ時でもよい、今の江戸趣味が亡ぶ時でもよい。

庭若葉藕の花散り盡しけり

藕の花の散るのは今年初めて知つた。白い淋しい花が暮春の風についついと散るのである。ガラス障子越しに見てをると空から霰のやうな

ものでも降つて來たかとあやまたるゝのである。其が散り盡した後にはもう庭に何の花も無い。

○其他一句。

草摘みし今日の野いたみ夜雨來る

鎌倉の野に草を摘んだ日の事であつた。夜半眼がさめて見ると、雨の降つてゐる音がする。天は雨を降らせて今日摘み荒した野を再び蘇へらせるのである、とさう考へることによつて私は安い眠に落ることが出來た。此句は其瞬間に出來た句である。

北陸旅行

十月一日

一時は食物を極端に制限して粥、刺身、パン、牛乳、鷄卵といふやうなもの許りにして見たが其結果は面白くなかつた。初めは二月に一度か三月に一度位下痢してゐたのが月に一度になり二度になり、遂には一週間に一度、甚だしいのは二度三度といふやうになつた。其結果私は大決心をして石塚左玄氏の唱道した食用療法を試むる事にした。

此事に就ては今後ホトトギスの一部を割いて自分の經驗をも發表し又他の經驗談をも徵して見度いと思つてゐるのであるが、此に其概略を述べると、一切の藥餌は全く之を廢し、適當の食物を攝取する事によつて疾患を治さうといふのである。此事に就いては古くから人の勸めを受けたこともあつたのであるが、其適當の食物といふのが牛蒡や、人參や、澤庵やなどであるところから、どうも疑惧の念に驅られて斷行して見ようといふ考は起らうともしなかつたのである。けれども粥も刺身もパンも鷄卵も駄目となつたといふ事が、私に半ば絶望的の勇氣を起させて、「明日はどんな事になるかも知れぬが、思ひ切つて試み

て見よう」と遂に其石塚流を斷行せしめるやうになつたのである。其處で私は玄米に、金平牛蒡、小豆に昆布を入れて鹽辛く煮たのと、澤庵、大根おろし、胡麻鹽といふやうなものを食つて見た。翌日は不思議に下痢しなかつた。其翌日も同樣に下痢しなかつた。一週間經つても二週間經つても下痢しなかつた。私は深い強い自信を得た。

蒼白であつた顏が少しづゝよくなつて來た。(これには灸點の功もあつたことゝ信ずる。私は四十日間灸を据ゑ通した)落窪んでゐた眼が少しづゝせり出して來た。食用療法を試みはじめて僅に二週間後の私はもう自分で病人であるといふ意識が餘程薄らいで來た。

私が旅行を思ひ立つたのは丁度其二週間目の事であつた。今迄でも旅に出て見たら或は氣分を引立てゝいゝかも知れぬと考へぬではなかつたが、旅に出て粥や刺身と勝手なこと許りを言つて居る譯にも行くまいと考へて、いつも思ひ止まつてゐたのであるが、大根だとか牛蒡だとか普通に人の食ふものさへ食つて居ればいゝのだと極つて見ると、其點に於て別に躊躇するにも當らず、其上北陸道は全く未知の天地であるから是非出掛けて見度いといふ心の勇みもあつて、私は遂に此旅行を思ひ立つたのであつた。

九月の中旬に信州に行く筈であつた水巴君が、まだ行かずにゐると

聞いたので、一緒に行つてはどうかとすゝめたら、行くとの事で同行することに極めた。

此旅の序や秋の善光寺

此日は特に記すべき程の事も無かつた。唯初めて旅に出た日だといふ事が何となく心を新にした。殊に妙義が段々に眉に聳えて來て、桑畑の多い其邊の景色がもう武藏野の平原が盡きて自然高地になつて來てゐる事を思はしめる樣になつてから一層其旅らしい心持を強めた。

其妙義の麓の桑畑の中に鑛泉の湧き出てゐる所が磯部であつた。私等は其處の林屋といふ宿屋に泊つた。

縁先には直ぐ碓氷川が流れて居た。其長い縁の突當りには竹藪があつた。

「敵を尋ねてゐるうちに病氣になつて、私に湯治をしてをるといふやうなところですね。」と水巴君が言つた。其狹い古びた縁の突當りに在る竹藪と、雨の度の大出水にかぎ取られたやうになつてゐる碓氷川の向う岸とは何となく荒寥の感を強めた。

「本當にそんなやうな心持のする宿ですね。」と言つて、私は猫板のそつてゐる長火鉢の上に目を落とした。

九時半に寢て夜長なる湯宿かな

十月二日

自然に熱を持つた溫泉の湧くのと冷たい鑛泉を沸かすのとは大變な相違があつた。箱根だとか修善寺だとかいふ溫泉場らしい暖かい感じは何處を探しても無くて、朝早く鑛泉の沸いた事を知らせる柝の音がうら寒く身に入みて響いた。

松岸寺といふ寺に佐々木三郎盛綱の墓があるのを弔ふことにした。宿の男が案内に立つてくれて、町を離れてから暫く桑畑の間を縫うて行つた。妙義も赤城も榛名も皆日の光を受けていゝ色をして聳えて居

る中にいかにも田舍道らしい道が長く續いた。

案内の男がいろ〳〵養蠶の話をして聞かせた。四化生と言つて一年に四度孵化する蠶のある事なども話した。

「斯んなに葉があるのなら、其四化生でも飼つた方がよからうに。」と私は言つた。折節道傍の畑の桑には水々した大きな葉がついてゐた。

「今頃この葉を摘むと來年は葉肉が逃げるから損だ。」と案内の男は言つた。

桑畑の向うに一株の芭蕉が立つてゐた。其芭蕉と押合ひをしてよろよろとした鐘樓が立つてゐた。其處がもう松岸寺であつた。大きな桑

の本堂の裏に廻つて見ると、同じやうな二基の墓があつて秋草の枯れたのが挿してある竹筒が一本宛其前に打つてあつた。其一が盛綱の墓で他の一つが大野九郎兵衛の墓であると案内者が言つた。大野九郎兵衛がこゝに突然出て來ようとは豫想しなかつたことであつたが、何でも此地に隱れて寺小屋をしてゐたといふ口碑が傳はつてゐるのださうである。

今度の旅行は前に陳べたやうな次第で思ひ立つたのであつたが、扨て旅行と極つて見ると其についていろ〳〵の欲望が起つて來るのであつた。先づ第一に地方の俳人をも訪ねて見ようと思つた。第二に沿道

の謡曲に關係のある名所をも檢べて見ようと思つた。謡曲の「藤戸」でおなじみの盛綱の墓を訪うたのも其爲であつた。

其日のひる頃には私等を載せた汽車が妙義の薄紅葉をすぐ車窓に眺めながら碓氷峠を上りつゝあつた。二十六の隧道を出たり這入つたりした。

紅葉客熊の平にどかと下りぬ

熊の平といふのは碓氷の中腹に在る停車場であつた。

トンネルの出口に集くふ人の秋

隧道の出口には必ず一軒宛の工夫小屋らしいものがあつた。其も板

葺屋根が隧道の煉瓦の壁からすぐ出てゐて、鳥や獸の巣を思はしめるやうなものであつた。

輕井澤には雨村君が出迎へてゐてくれた。淺間はすぐ其處に峙つてゐて雲の間から白い煙が立昇つてゐた。木では背の低い落葉松の類、野菜では蕎麥の外に生存するものがない淺間裾野は滿目蕭條として高原の感じがひし〳〵と人に迫るのであつた。

高原の秋に引ずり上げられぬ

雨村君があそこが追分だ沓掛だと敎へるあたりには、石ころを置いた淋しい板屋根がぽつ〳〵と見えた。なまじひ其人家らしいものゝま

れまれに見えることが高原の秋を一層淋しく色どつて居た。

落葉松の間に點在してをる櫨や蔦が眞赤に染まつてゐた。

「これを見るといつも大久保の躑躅を思ひ出します。」と雨村君が言つた。此場合に人の雜沓する躑躅園を思ひ出すことが私には一層淋しかつた。けれども凡てが灰色がゝつた中に獨り血を流したやうに赤く染まつてゐる是等の紅葉は目が覺めるやうに美しかつた。

御代田で下車して三臺の人力車を連ねて仲山道を岩村田迄行き其から左折して志賀村に行つた。仲山道は前の車の轍から輕い土が灰のやうに舞ひ上つた。灰のやうにといふよりも灰其ものが舞ひ上るのであ

つた。此灰が何處やら邊迄續いてゐると雨村君が言つたが、其地名は忘れてしまつた。私は明治二十六年に此處を徒歩したことを思ひ出した。立科や八ヶ岳は雲の中に在つた。飛騨境の山々も曇つてゐた。澤山の高山に取圍まれてゐる此佐久の高原を東の山間に分け入つた所が志賀村であつた。

神津猛といふ名前は藤村君の「破戒」の卷頭に見出される名前であつた。土地の人は皆「赤壁さん」と呼んでゐた。志賀村には神津といふ名前の家が幾軒もあるが赤壁さんが其本家であるといふ事は車夫が、他の車よりも遲れて私を牽き乍ら話して聞かせた。其赤壁さんの家に着

いたのは三時を過ぎてゐた。

令閨の蝶女さんを初め其處に集つて來てゐる人の中には已に鎌倉で知つた人があつた。私等はすぐ後ろの山の松茸狩に案内された。

手籠に一杯の松茸を取つてから頂上の岩に腰を掛けて撮影をしたり淺間から北佐久の高原を展望しながら話したりした。雨村君等は謠曲「鉢の木」の道行の文句に當てはめて地名を説明してくれた。輕井澤を遠近の里といふ事や、すぐ目の前に聳えてゐる平井山を大井山ともいふ事や、現在何とか呼んでゐる所を友の里といふ事やを一々指呼し乍ら敎へてくれた。

風の強く當たらぬ所に陣取つて茸狩五句を作ることになつた。酒が暖められて今取つた許りの松茸があぶられた。人々の顔がだん〳〵暗くなつて來た。提灯が麓から上つて來た。ポキ〳〵と生木を折るらしい音が聞えたと思ふと其うち蠟燭の裸火がゆれて私等の鼻先に紅く紅葉した櫨の葉がゆらめいた。よく見ると其櫨は當意卽妙の燭臺として大地に突立てられたので蠟燭の裸火は誇り氣に其尖に燃えてゐた。人人は三所にともされた此燭臺を取り圍んで苦吟の顔を鳩めてゐた。櫨の葉影が動く度に人々の顔の形が變つた。見渡して見ると先刻雨村庵を一緒に出た時よりも大分新しい顔が殖えてゐるやうであつた。麓の

方から又提灯が上つて來た。岩村田からも誰々が來たのだといふやうな聲が聞えた。

提灯の光に探り〳〵山を下つたのはもう大分遲かつた。其から座敷に並んで選句に取掛つた。其結果。作者選者二十二名。

水巴(二十九點)、柳城、一草(各十九點)、雨村(十六點)、虚子藻川(各十四點)、欽山(十二點)、一歩、笠城(各十一點)、不藏(十點)、金丸(九點)、以下略。

高點句は一々掲げず。次の如き句があつた。

我山の菌狩りけり佳客あり　雨村

膝突いて菌を掘れば指寒し　雨村

茸山の人下りず灯の動くかな　水巴

人動けど朽葉に茸の靜かな　同

茸とれず紅葉をめでゝ歸りけり　笠城

賓客に松茸にこのまとゐかな　欽山

茸狩や後れても恨みなかりけり　柳城

茸狩や木の間に見ゆる千曲川　藻川

茸狩りて山に暮れけり灯遙か　一草

休みたる萩の下根や茸二本　蝶女

人間の鼻茸山を嗅ぎにけり　虚子

高原の秋に在りけり菌山　同

見上げたる松の高さや菌狩　同

何か俳話をせよとのことであつたので、私は斯ういふ意味の簡單な話をした。

句作についていろ〳〵必要な條件があるが此處には三個條を上げて見る事にする。其一つは寫生といふ事である。之は私としては言ひ古し說き古したことであるけれどもいつ迄經つても新しい意味を持つて居ると考へる。寫生といふことは言ひ換へればよく物を見るといふこ

とである。多くの人は心を虛しうしてよく物を見るといふ事をしないで、曾て人から聞いたことや曾て自分で一度判斷した事やを土臺にして、今目の前に現はれて來た事をも容易に解釋してしまふ癖がある。これでは物に新しい生命、新しい趣味を見出すことはむづかしいのである。たとへば今日の茸狩にしたところで、いくら後の山で實際茸狩を遣つて見たにしても、今日出食はした事實をよく見、よく翫味し、よく考へなければ其は何にもならない。たとへば茸が朽葉を被つてゐるといふだけの事は何もわざ〳〵山に行つて見なくても机の上で想像のつくことである——已に人々の言ひ古してゐることである——けれ

ども實際山に行つて見ると其朽葉を被つてゐる茸にはいかにも靜かな心持があることが新たに發見される。そこで其靜かなといふ所に着眼して更に其邊の容子を見ると人が茸を獲ようとしてぞろ〳〵往來をしてゐるのが今更のやうに際立つて眼につく。菌の靜かなのに對して人の活動が眼につき、人の活動に對して菌の靜かさが愈〻心にしみる。其處で「人動けど朽葉に茸の靜かな」といふ句は出來たのである。又菌を土から掘るといふ事位は疊の上で膝を抱いてゐても想像のつく事であるが、併し其菌を掘る時の心持は實際に當つて見ねば解りやうが無い。「膝突いて菌を掘れば指寒し」といふのはたしかに此經驗から來た

感じを言ひ現はしたものである。是等は皆寫生から得來つたところのもので、これあることによつて俳句に一分宛の深さと新しさとを加へて行くことが出來るのである。即ち寫生といふ事は神が盡くる事の無い寶庫の鍵を我等の手に渡して居る所以のもので、我等は一に此寫生によつて無盡藏に新しいものを自然物から見出して行くことが出來るのである。詳しく言へば之を作者の頭の側からも說明しなければならぬのであるが、其は却つて煩雜になる虞があるから、略して唯「よく見、よく味ひ、よく考へる」といふ事を私は寫生といふ語に一括して一番にお勸め申上げるのである。

其二は推敲といふ事である。之も言ひ古したことで何も珍らしいことでは無いのであるが、併し席上の諸君の句を見るとあまりに此推敲の缺けてをるのが眼につくので、一言御注意迄に申上げて置き度いと思ふ。芭蕉も舌頭に千轉するといふ事を言つて居る。「去來抄」などを讀んで見てもいかに一句を完成する上に推敲に苦心して居るかゞ十分に看取される。推敲といふ事は決してむづかしい文字を使ふとか、洒落た敍法をするとか、乃至徒に彫琢を加ふるとかいふ事では無い。要は現はさうと欲するところの物を十分に現はすに在る。其も必ずしも十七字の面に現はし盡くすには及ばぬので、たとひ十七字の面には一

部分ほか敍して無くつても其を通して作者の感じさへ遺漏なく他に傳はる事が出來ればいゝのである。此席上の句のうちにも私が讀んで見て「何だ詰まらない斯んな句！」と感ずるところのものに或は作者はたしかに面白い或ものを見出してをられるのがあるかも知れない。唯殘念なことには句の敍法が不完全な爲に其は作者の獨り合點に止まつて遂に他人には傳はらずに終つてゐるのである。此點に於て文字驅使の上に推敲といふ事は決して忽せにすべきものではないのである。斯ういふ趣向が見つかつた、よろしいすぐ斯ういふ句にしてやらう、といふだけではいゝ句を作る所以の途では無い。其趣向を言ひ現はすのに

はいかなる敍法を取るべきかといふことに骨を折るべきである。くれぐれもいふが其は決してむづかしく敍するとか奇拔をてらふとかいふのでは無い。唯十分に感じを傳ふるに在る。十分に感じを傳ふる爲には平明を主とせなければならぬ場合が寧ろ多い。平明は無造作といふ事では無い、一應も再應も苦心を經た後の事である。

其三は、品位といふ事である。どうも此席上の句には品位の無い句が多い。下等な句が多い。其は必ずしも材料でいふのでは無い。一知半解の人は兎角材料によつて句の品格を論じようとするが其は間違つてをる。材料は賤しいものであつても句にしやうによつては品格のい

いものになる。又材料の高尙なものでも句にしやうによつては品格の惡いものになる。此「句にしやう」といふ事は取りもなほさず作者の頭の働といふ事になる。卽ち如何なる材料でも之を品格ある句にするといふ頭の働を必要とするのである。扨て其頭の働といふ事はどういふ事か、其を押詰めて行くと矢張「よく見、よく味ひ、よく考へる」といふ事に歸着して來る。詰り諸君の句が品格が惡いといふのは深いところ鋭いところ新しい所が缺けてをるといふ事に歸着する。

私は斯んな事を喋つたやうに記憶する。

寢床に這入つたのは遲かつた。

十月三日

靜な廣々とした座敷に睡を貪つた。何枚かの襖が勝手の方の物音を遮つて居る上に雨戸はいつまでも靜に引かれてあつたので、我等の眠は安穩に護られたのである。唯時々夢に這入るのは雨の音ばかりであつた。

秋雨十句。作者、選者各十六人。

虚子(二十五點)、水巴(二十二點)、一草、笠城(各十五點)、吳子、欽山(各十二點)、紅村(九點)、雨村(七點)以下略。

秋雨の降る程遠き我家かな　水巴

我爲に灯運ぶ宿や秋の雨　同

家づとに蕎麥粉忘れじ秋の雨　同

山國や町がありける秋の雨　同

讀みさして灯火待つや秋の雨　漂雲

謠はぬに心すねたり秋の雨　同

灯し去る祈願の人や秋の雨　同

火の山の麓の蕎麥や秋の雨　紅村

お國入り裾野にかゝる秋の雨　不藏

中空を啼く鳥は何秋の雨　欽山

稲掛けて心落ちつく秋の雨　かつ女

秋雨の雪に間近き山家かな　虚子

三日目の旅の寢覺や秋の雨　同

秋雨の傘明るさや湯殿まで　同

淺間つゝむ雲秋雨になりにけり　同

秋雨や旅嚢探して衣輕し　同

就中廣葉打つ音や秋の雨　同

旅にて二句

秋雨の今日を灯ともす事をかし　虚子

秋雨の我おもふらん人を懐ふ　同

「人間の鼻茸山を嗅ぎにけり」といふ句は月並では無いのか、といふ非難があつたので私は之が辯護を試みた。何某といふ男の鼻が一本の松茸を嗅ぎ出したといふのならば所謂月並者流も敢てする所であらうけれども、人間の鼻が茸山全體を嗅ぐといふことは彼等はよう言はぬであらう。人間の鼻が殆ど茸山位の大きさになつてゐる所に此句の興味はあるのである。或は之を單に技巧の句といふかも知れぬが、斯ういふ感興を得たからこそ斯ういふ句が出來たので技巧のみの句では無

い。決して佳句として辯護するのでは無いが、近來月並といふ言葉の妄用せられるのを嘆かはしく思ふ所から敢て一言を費すのであると。

此日は又二三番謠を謠つた。蝶女、かつ女の熊野のシテワキは殊に興味多く聽かれた。

十月四日

雨が晴れかゝつたので雨村、水巴の二君と車を連ねて小諸に向つた。一度岩村田に出て其から淺間の裾を西に突進むのであるが岩村田より先は立派な道が出來てゐて一昨日仲山道で見たやうな灰埃は立たなかつた。

岩村田より小諸迄道の秋

高原や粟の不作に蕎麥の出來

立科、八ヶ岳、飛驒の諸山は今日も雲の中に在つたが、頭上の淺間は拭つたやうに晴れて、唯ちぎれたやうな白雲が牙山とか稱へらるゝ噴火口壁の鬼の牙のやうな形をした岩に時々ひつかゝつてゐた。

小諸の町の事は藤村君の文章で馴染になつてゐたが、ある峠から、あれが小諸の町だと敎へられた時は道にものなつかしく覺えられた。其處には淺間の裾野がパノラマのやうに目の前に展開せられてゐて、

人間の力が及ぶ限りの高さに迄畑を開墾してゐるのがカルタの札を並べたやうに眺められ、其間に杉の林が毛蟲のやうに這つてゐた。小諸の町は其裾野の一端に在つた。

小諸から又汽車に乘つた。汽車は千曲川と共に北佐久の高原から善光寺平に奔注して下つて行くのであつた。善光寺平も之を越後の平原に比べれば尙遙に高地であるが、佐久の高原に比ぶれば遙に低地になつてをる。其につけても武藏野の平原と佐久の高原の繋ぎ目になつてゐる碓氷、荒舟の峻坂は想像に餘りあるものである。

雨村、水巴の二君は屋代驛で下車して姥捨に迂回したので私は獨りで長野に直行した。楓村君の出迎を受けて善光寺山門前の藤屋に投宿、露香一露二君の來訪を受けてゐるうちに雨村水巴の二君も到着。

十月五日

楓村、雨村二君の案内で善光寺參拜。

善光寺は淺草寺の大きいやうなものと思へばいゝといふ事を聞いてゐたのであつたが、淺草寺よりは遙に感じがよかつた。規模の雄大といふ許りで無く、一體に面白味が多かつた。私は元來人間離れのしてゐる山寺などにも懷かしみを持つ事は持つが、どちらかといへば市塵

に立交つてゐる、斯ういふ寺の方により多くの興味を見出すのである。其點からいふと或は私は先天的の俗物なのかも知れない。俗物で結構なのである。寧ろ私自身は淺草寺や善光寺のやうな大俗になり得ないのを大きな弱點だと自覺して居る。私は大香爐の香煙の下をくゞり乍ら暫く堂内を往來して自分の弱小なことにつくづくと思ひ入つた。

謠曲「柏崎」や「土車」の文句が思ひ出された。

今日は日暮から俳句會があるといふので私等は僅の時間を利用して柏原に一茶の古蹟を弔し、序に野尻湖を一見することにした。水巴君は宿にとゞまつて同行しないことになつたので私は露香、楓村、雨村

の三君と共に汽車に乘つた。

柏原は信越の境の分水嶺で、先に千曲川と共に佐久の高原から善光寺平に奔注して來た汽車は、更に又柏原迄登り詰めて、こゝから再び越後の平原に向つて二度目の奔注を試むるのである。我俳人一茶は實に高原詩人として此柏原に產れ、又此地に死んだのである。一茶の事に研究を續けてゐる露香君が我等の先導者であることは何かにつけての便宜を得た。

毎年一二月頃になると列車が雪の中に立往生をすることが珍しくないといふのも此柏原近傍の事であつた。戸隱、黑姬、妙高、飯綱等の

諸高山は生憎雲の中に隠れてゐたが、併し其秋曇りのしてゐる薄ら寒い日であることが、一茶の遺蹟を訪ふといふ事には殊にふさはしく感ぜられた。

停車場には一本の櫨が眞赤に紅葉してゐた。此處に下車したものは我等一行の外に質素な風體をした一人の百姓許りであつた。

驛前の蕎麥屋に這入つて名物の蕎麥を食ひ乍ら村酒を飲んだ。私が蕎麥のかけを三杯食つたことは生れてから此日が初めてゝあつた。

人並に蕎麥三杯や秋の風

讀者諸君よ。試みに、越後街道が帶の如く續いてゐる高原の一村落

を想像せよ。道の中央には狹い川が流れてゐる。川の兩岸には柳の木がある。其柳も彼處に一本此處に一本といふやうに極めて稀れ〳〵にある。川の兩岸の狹い路を挾んで屋根の低い人家が町らしく並んでをる。これが柏原の宿である。——尙讀者は斯ういふ事を忘れることは出來ぬ、此街道は昔は佐渡の金飛脚も常に通つた道であるといふ事を。參勤交代の大小名は固よりの事——其中に土塀をめぐらした稍大きい一軒の家はもとの本陣中村氏の舊宅で、其家に並んでずつと町外れの方に貧しげな一軒の家がある、其が今でも小林彌太郎といふ一茶と同姓同名の人の住まつてゐる家である。

露香君と今一人の案内者――露香君の知人である此地の人――は私等を其家の前に立たせて置いて、折節庭で藁仕事をしてゐた此家の細君と何事かを話してゐた。細君は鐵漿をつけた齒をむいて笑ひ乍ら奥の方を見たのが私の眼にとまつた。露香君等は家の横手から穢い畑の間を通つて裏に出た。其處には一匹の馬が繫がれて我等の往手を塞いでゐた。私等は其馬の尾にすれ〳〵に其處を通つて一つの粗末な藏の前に立つた。

「此藏が一茶の死んだ藏です。」と露香君が言つた。

「三年間煮焚をした爲に椽があんなに燻つてゐます。」と他の案内者は

藏の天井を指した。成程我等の臺所でよく見るやうに椽は黑く燻つてゐた。先に細君のゐた表の家は一茶の歿後に漸く建つた家で、其生前一度燒けてから三年間藏住をして、自分では家を建てるに及ばずして、遂に此藏の中で死んでしまつたのださうである。

人空し今年の米の出來惡し

ぢつと立つてゐるに堪へぬやうな臭氣がどこからかして來た。其は藏の横の積肥の臭であつた。此藏を此儘保存し度いものだといふやうな說が同行者の中から出て誰にも異存のありやうが無かつた。

「發起さへする人があればどうでもならぬことはないでせう。」と雨村

君が言つた。私は此言葉を面白いと思つた。

一茶の墓にも詣り、俳諧寺にも立寄つた。俳諧寺といふのは此柏原の驛長をしてゐる高橋氏が專ら斡旋して一茶の記念堂を建立したのである。堂の縁に立つた時飯綱颪の秋風が寒かつた。

此秋風のもて來る雪を思ひけり

私等はそれから一里半の道を往復して野尻湖を見た。野尻湖については嘗て安倍能成君が永くホトトギス誌上に野尻湖日記を掲げたことがあつた。野尻とは信濃尻の義で越後に近い國境に在る。池は信濃に屬しながら水は越後の百姓の權力内に在るといふことである。辨天島

に渡る時間はなかつたので唯湖畔に立つて十分ばかり眺望を擅にした。

秋風に燒けたる町や湖のほとり

湖畔茶屋の郵便函や薄紅葉

再び汽車に乘つて振り顧つて見る柏原の町は、前にも增して物淋しかつた。

これがまあ終の栖家か雪五尺

といふ句は一茶が放浪の旅から戻つて愈此處を永住の地と定めた時の句であるさうなが、其句に含まれてゐる淋しさは今も尙變るところ

は無かつた。

一茶についてはしらべて見度いことも多いし發表し度い意見もあるが、何は兎もあれ彼の棲家のあとを尋ね墓を弔したといふ事は、此上へ無い滿足な事であつた。

其夜の城山館の俳句會は絶えて久しく逢はなかつた悠々、君遷子の二君にも逢ひ、春畦君等の久しく名を知つて而も生面の人にも逢ふ機會となつた。

秋風や野の大石に集く蟲　青京

秋風や斯く他評買ひし句は棄てん　同

畫稿未だし野の秋風に歸りけり　壁生

秋風吹不盡友來る　悠々

絶えて久しき君を迎ふや秋の風　君遷子

機をうかゞふに忍ぶ久しき秋の風　羽白

行く舟や湖畔空しく秋の風　春畦

高原の秋風や墓を拂ふ人　九萬字

象山祭秋風の町賑へり　一露

この平秋風吹いて善光寺　虚子

灯火の穂に秋風の見ゆるかな　同

十月六日

水巴、雨村の二君に分れて獨り北陸の旅に向ふことにした。國民新聞に投ずる爲に一茶の遺蹟を訪ふ文章を汽車の中で認め始め、昨日通つた柏原邊は殆ど知らぬ間に過ぎてしまつた。

前に言つたやうに汽車は柏原、田口の間の分水嶺を通過してから非常な勢で越後の平原目掛けて奔り下るのであつた。廣々とした稻筵が目の前に展開せられた。たしかに其は日本海と思はるゝ一抹の水が雲際に眺められた。北佐久の高原からいふと汽車は二度段を下つて初

めて越後の平原に這入つたのであつた。

高田。其は今年亡くなつた香墨君が久しく住まつてゐて、新俳句を皷吹した土地であつた。私は其事と、越後中でも此地は雪が深いといふ事などを思ひ出した許りで、鶯池君が此地に在るといふ事を思ひ出すことが出來なかつた。其は今考へても殘念な事であつた。

日本海の風光は私の眼の前に在つた。日本海は荒海だといふ事を聞いてゐたのだが、鎌倉あたりの海よりも波の小さいのを物足らなく思つた。灰色に曇つて居る北海の天は低く垂れ下つてゐて佐渡らしいものは更に目に入らうともしなかつた。

柏崎といふ呼聲を聞いて、再び謠曲「柏崎」を思ひ浮べ乍ら見るとも無しに窓外を見ると其處に車中を覗き込んでゐる耐雪君の顔とぴたりと會つた。耐雪君には長野から手紙を出して先づ新潟を一見し、歸路越後鐵道を取つて出雲崎に下車する積りだといふ事を言つて遣つたのであるが、其が態々此柏崎迄出迎へてくれたのであつた。さうして私と新潟迄同行してくれるのであつた。

北條を通過する時に夕村、牛詰、鶴聲の諸君が話題に上つた。雪國としては高田のみが世上に有名であるが、實際は高田よりは北條の方が雪が深いといふ事も耐雪君によつて話された。

長岡には川上君が停車場に出てくれてゐた。これは從來北越新報紙上にホトトギス紹介の勞を惜まなかつた同君に一度逢つて置きたいと思つて、私の方から希望して遣つたのであつた。多忙の中を差繰つてくれた同君の厚誼を此に感謝する。

新潟に着いたのは九時頃であつた。長く續いてゐる灯火を往手に眺め乍ら、信濃川に掛つてゐる長橋をごろ〳〵と車で渡つて行く時の心持は、今迄に味つたことの無い旅情の一つであつた。引き延ばし寫眞のやうな赤い大きな半弦の月がぽんやりと水の上に掛つてゐた。車はいくらごろ〳〵と引かれても橋は容易に盡きなかつた。朔北といふや

うな感じが常に頭を離れなかつた。灯火の町は美しくつても荒寥の氣は付き纏つてゐた。

篠田といふ宿に耐雪君と共に一泊した。

十月七日

朝烏啼君が尋ねて來てくれた。同君とは生面と思つてゐたがよく話をして見ると舊友鈴形秀太郎君を通して已に交を訂したことのある事を明かにした。鈴形君と私とは暫くの間小石川の下宿に一緒にゐた。其頃の鈴形君は早稲田の文科に居て、校友會の

時かなんかに顔に白粉を塗つて芝居をした。外題は地震加藤で畠山古瓶君が清正になり鈴形君は太閤樣になつた。坪内先生は羽織袴のまゝ舞臺に立つて何かと世話をされ、金田君が出語りを遣つた。金田君も私等と一緒の下宿にゐた。「何うとかして一同に……」とか何とかいふ所で御殿女中に至るまでが皆泣くのであつたが、其時坪内先生も御殿女中の後に坐つたまゝ握拳で兩方の眼を抑へて泣く眞似をされた。見物人の生徒が一同にどつと笑つた時坪内先生も見物席を振り向いて笑はれた。多くの役者は皆笑つたが清正と太閤樣とは笑はなかつた。殊に太閤樣は格別に胸を突き出してそつくりかへつてゐた。私は鈴形君

や伊藤木半君などゝはよく一緒に酒を飲んだり遊び歩いたりしたものであるが、鈴形君に就いては此胸を突き出した太閤様の印象が最も深く頭に殘つてゐる。其外に今一つ忘れようと思つても忘れられぬ事がある。其は外でも無い私は一日鈴形君と一緒に近所の錢湯に行つた。私は冬になると踵にあかゞりが切れるのが癖で、いつも其に難儀をしてゐた。其を見た鈴形君が、あかゞりが出來るのはよく踵を洗はぬからだ、輕石でぐん〳〵と擦つて見給へ、すぐ療る、と言つた。其處で私は痛むのを辛抱して熱心に其あかゞりの上を輕石で擦つて見たが矢張痛いばかりで療らなかつた。けれども其から後冬になると私はよく輕

石で踵を洗つて、其度に鈴形君を思ひ出すのであつた。其鈴形君を通して烏啼君と私とは已に相識の間であつた事がいろ〳〵話が進むにつれて思ひ出された。私はもつと寢轉んで昔話がしたかつたが、誘はるるまゝに新潟市内の見物に出掛けた。

市内は格別の事も無かつた。嘗て想像してゐたよりも水も橋も汚かつた。二階から覗いてゐる赤襟のお酌などにも餘り美しいのは居なかつた。唯町を通るたゞの女に美しいのが多かつた。

濱に出て地引網を見た。鎌倉邊の地引網よりも少し大きかつた。三人は砂に腰を埋めて氣永く其網の上るのを待つた。目印の樽は少し宛

陸に近づいて來た。曇つた空はいつ迄も低く垂れてゐた。途切れ〳〵
新傾向句についての話が出た。私は絶對に新傾向句とは相容れぬもの
である事を表明せうとした。烏啼君は半ば私に同じ半ば辯護した。今
日も佐渡は見えなかつた。二時間近く砂に腰を埋めてゐるうちに日本
海といふものゝ感じが少し宛頭に入みて來た。遂に引き上げられた地
引網には小さい太刀魚が四五匹に二三の小肴許りであつた。澤山の獲
物の無かつたといふ事が、此場合の私の心持にしつくりとはまつた。
晝飯は私の註文で汁粉屋に這入つた。私は田舍汁粉と雜煮とを一椀
宛食つた。之も石塚式の食物であつた。

西垣伴左畫伯を訪問した。私は西垣氏が此地に居られるといふ事は
更に承知しなかつたのであるが、能樂の話がもとになつて、西垣とい
ふ畫家が能の面を製作しつゝあるといふ事を聞いて其名前を聞き匡し
て見ると其は正しく同郷の先輩で、中學の一二年頃畫の教授を受けた
事のある西垣先生に相違無い事を確めたので、私は其能面を見旁訪
問することにした。烏啼君が電話で學校に在る同氏に時間の都合を聞
き合はせて置いてくれたので約束の二時過に三人で訪問した。
鬢髪が霜になつてゐる同氏を見た時は初めは人違であつたかと思は
るゝ迄に面變りがしてゐられたのに驚かれたが、少し話してゐるうち

に昔の面影が底の方から浮み出て來て、矢張あの若々しく親切であつた昔の西垣先生に相違なかつた。

能の面は誰に習つたといふでもなく自分の工夫で遣つて見てゐるのだと言つて一つの箱に一杯這入つてゐるものを取出して見せられた。磐若や、小面や、增や、癋見などがいろ〳〵あつたが孰れも完成してゐるものは無かつた。氣に向かないと刀を取らないし、一つ完成するとすぐ人が持つて行つてしまふので今自分の手許にはこんなものほか無いと言はれた。完成されたものを見ないと、私のやうな素人には好惡さへ言ふことが出來ないが、併し胡粉だけざつと塗つてあるものなど

を見ると、些の塵氣をとゞめないで氣持よく見ることが出來た。私は此隱れたる努力に私かに敬意を表しないわけには行かなかつた。

畫伯は酒肴を整へて私等を款待してくれられた。又自分で緋の蕪と松山城との畫を書いて私に贊を望まれた。私は畫伯の趣向になる藁の筆を取つて古い句を其上に題した。

畫伯は寶生流を謠はれるさうである。私は其をも伺ひ度いと思つたが、其を言ひ出す機會なしに遂に辭去することにした。

途中で新潟新聞社をも訪ひ烏啼君の家にも立寄つた。

其夜烏啼君の電話で江口氏は皷を携へて旅宿に訪問された。羽衣は

私が謠つて江口氏が小皷を打ち、松蟲は江口氏が謠つて私が大皷を手拍子で打つた。あとで素謠をも一番謠つた。

丁度明日江口氏等の謠會があつて其には西垣氏も出席されるから是非出ないかと勸められたが、私はまだ澤山の前途を持つてゐて新潟許りに日を重ねる譯に行かぬので、殘念乍ら其を辭した。

日本海を吹いて來る風が大粒の雨を其夜話の雨戸に打ちつけた。

十月八日

耐雪君と越後鐵道會社の應接間にゐると其處へ烏啼君も來た。私達

は鐵道會社の木村老書記の案内の下に彌彦神社に參拜することになつた。

彌彦神社といふのは越後の國の一の宮で、神武天皇の瘢國創業時代に北邊を鎮撫したところの天香語山命を祭つたものだとの說もあるし又崇神天皇の四道將軍の一であつた大彦命を祭つたのだといふ說もあるさうである。孰れにしても常陸の鹿島、香取の二神と同じやうに地方の草賊を戡定して功ある神を祭つたものに相違無い。私等は西吉田にて下車、三里の道を車を連ねて行つた。路傍の木には竹が渡して一面に掛稻が掛けられてあるので、恰も稻の塀の中を行くやうな心持が

するのであつた。秋雨は小止みもなく降り注いだ。

いやひこのおのれ神さび青雲の棚引く日すら

小雨そぼふる

と萬葉にある其彌彦の峰がすぐ額を壓して聳えてゐる邊に澤山の旅人宿が並んでゐた。車は其一軒の宿の前に下ろされた。

私等は宿屋の足駄を借りて直に參拜に出掛けた。社殿は明治四十五年に炎上して今は小さい假宮がある許りであるが、其規模の大きい事は燒け殘つてゐる杉の木立や末社の建物などを見たゞけでもわかる。檜の新しい宮柱に所々縄墨の跡の見えるのも潔い感じがした。

秋も假りの御宮柱縄墨のあと

社殿に額づけば流石に神靈の尊さが身に入みわたる。

秋雨を降らすこともこの神慮

旅宿に歸りて二階から彌彦の峰を見上げると、秋雨の雲がすぐ其處を往來してゐる樣迄が神さびて尊く眺められた。

旅宿で晝飯をしたゝめてから我等三人は木村氏に分袂し、車を地藏堂驛に返した。彌彦の峰の隣峰であるところの國上山の麓に在る國上寺にも參り度いと思つたのであるが時間の都合で其は見合はせた。國上寺には謠曲「禪司曾我」がある爲に是非一見し度い當初の希望であつ

たのであるが、果すことが出來なかつた。

出雲崎驛に着いた頃には雨は止んでゐた。烏啼君は彌彦迄私等に同行すると言つて來たのが又出雲崎迄も同行することになつた。三臺の車が一里半の峠を越えて日本海の海波に浸つてゐる出雲崎町に這入つたのは人顔が僅に辨ぜられる位の夕刻であつた。出雲崎町といふのは海岸に沿うた長い〳〵漁師町であつた。

烏啼君は平木旅館に投宿し、私は出雲崎と町續きになつてゐる尼瀬の耐雪君の家に導かれた。晩食をしたゝめてから出雲崎町圖書館の講演に出て一場の講演をすることを望まれた。私は何も纏まつた腹案を

持つてゐなかつた許りか講演といふやうなものをすることは今晩が初めてゞあるので、少々躊躇したけれども思ひ切つて遣ることにした。

圖書館には三四十人の人が集まつてゐた。私は斯んな話をした。

「荒海や佐渡に横ふ天の川」といふ句は芭蕉が出雲崎町で詠んだものであるといふ事は豫て聞いてゐたが、實際此地に來て此句を誦して見ると又特別の感興が起る。此句は芭蕉集中でも有名な句であるが、併し此句が萬一芭蕉の句で無くつて全く名の聞えてゐない人の句であつたとしたらどうであらう。或は我々は芭蕉の句として此裡に見出す程の面白味を此句中に見出し得ないかも知れぬ。俳句といふやうな短い

文學は此點に於て小說とか戲曲とかいふ長い文學とは違つた一つの性質を持つてをる。

紫式部の「源氏物語」は其作者が紫式部であるなしに拘らず「源氏物語」としての面白味は依然として變らない。近松の淨瑠璃にせよ馬琴の著作にせよ皆同じ事である。ところが和歌や俳句となると往々にして、作者と併せ稽へなければ其歌なり句なりの面白味の全部を受取りかねるといふやうなところがある。此「荒海」の句の如きは或は芭蕉の句で無いとしても、其雄大な景色を詠じたといふやうな點に於て、作者を問はず唯句として尙十分の面白味を受取ることが出來るのであ

るが、併し其にしても無名の人の句でなくて芭蕉の句であるといふ事が一層此句の上に價値を增すことになる。況や此「荒海」の句の如きでなくて芭蕉集中にあるところの多くの句の如きは、其が只人の句としては一顧の價値のないものが芭蕉の句として考へて見ると尙相當の價値を見出し得るといふやうなのが多い。「源氏物語」や「八犬傳」や「天網島」やは作者は誰であらうが其は問ふ必要が無い。長篇の小說とか戲曲とかいふものになると作者と作物とは切離して考へられるのであるのに、俳句の如きは切り離して見ることがむづかしいといふのはどうしたものであらう。其は見るものゝ誤りであらうか。又不見識であら

うか。其が見るものゝ誤りでも無く不見識でも無いとしたら、其によつて俳句の如き短詩形のものゝ價値はどう評價すべきであらうか。

私は其を誤りとも不見識とも考へない。其は寧ろ當然の事と考へるといふのは、俳句の如き短詩形のものにあつては決して作者の抱懷してをる感情なり知識なりが其一句の中に十分に陳べらるべき筈が無い。此句にしたところで「奥の細道」には何もしるしてないが、「銀河序」には次の如き文章が添うてをる。

北陸道に行脚して越後國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡が島は海の面十八里、滄波を隔てゝ東西三十五里に横はり臥したり。峰の

嶮難、谷の隅々迄流石に手にとる斗りあざやかに見え渡さる。此島はこがね多く出てあまねく世の寶となれば限りなき目出度き島にて侍るを、大罪朝敵の類ひ遠流せらるゝによりて只おそろしき名の聞えあるも本意なき事に思ひて窓押開きて暫時の旅愁をいたはらんとする程に日既に海に沈みて月ほのくらく銀河半天にかゝりて星きら〳〵と冴たるに沖のかたより浪の音しば〳〵運びて魂けづらるゝ如く腸ちぎれてそゞろに悲ひ來れば草の枕も定らず墨の袂何故とはなくてしぼるばかりになん侍る。

荒海や佐渡に横たふ天の川

斯うある。若し芭蕉が俳人で無くて、今の新體詩人のやうなものであつたならば決して「荒海や」の十七字では滿足しないでもつと自分の情懷を十分に披瀝した長篇の詩としたであらう。けれども芭蕉は單に十七字の俳句として其觸目の光景を「荒海や」の吟詠として其他の事は此「銀河序」に前置として陳べてをる。之は俳句が情懷を敍する上に完全な文學でないことをよく證明してをるものと言つてよい。又讀者の側から言つても單に荒海の句其ものが寫して居る景色に興味を見出す上に更に此前置によつて作者の主觀の側の消息を解し兩者を併せ考へて一層より多くの興味を見出すことになるのである。さうして私が前

に言つた、此作者が芭蕉であることを知ることによつて更に此句に、より多くの價値を見出すといふ事も恰も此前置と同じ意味で、作者は芭蕉であるといふ考が頭に在る爲に、芭蕉其人の性行とか人格とかいふものが一つの大きな背景となつて——言ひ換へれば不文の大きな前置となつて——此句の陰に潜んでをることになるのである。

俳句は悉くさうだとは言はない。中には作者が誰であらうとも唯單に俳句として面白いといふものも無いことはない。否相當に澤山あるであらう。けれども多くの場合に於て俳句の如き短詩形のものは、小說戲曲の如き長詩形のものよりも作者を知ることに於て一層句の味

に親しみ得るといふ事は疑ふことの出來ない事實である。

これは一方からいふとたしかに短詩形の大いなる短處である。多くの人が俳句といふものに對して感ずる大なる不滿足の一つである。けれども此處が又俳句といふものゝ一方の長處を爲して居ることを忘れてはならない。私が今夕特に諸君に申上げようと思ふのは卽ち其點である。

私は前に「源氏物語」や「八犬傳」や「天網島」やは小說、戱曲として作者の誰たるかを問ふ必要がない、面白味は單に作物其ものにあるのだといふ事を申上げたが、併し其長篇の作物にしたところでよく之を玩

味せうと思へば矢張作者の主觀の側に立入つてしらべて見る必要がある。殊に近來の新しい文藝になつて來ると、其傾向が著しくなつて來てゐる。卽ち作者の生活と文藝品とは切り離して考へられないといふところに新文藝の新生命はあるやうに考へられる。さういふ立場から見ると和歌や俳句の如きものは却つて其點に於て一つの大きな特色を持つてをるとも言へるのである。詳しく言へば芭蕉の文學は十七字の俳句では無くして芭蕉其人の生活である。西行の文學は三十一文字の和歌ではなくて西行其人の生活である。近くは子規居士の文學にしたところで十七字の句、三十一字の歌でなくて子規居士の生活であ

る。句なり歌なりは其生活の流の上に浮いて居る泡である。比喩をかへて言へば生活は地下を這うてゐる竹の根である。俳句や和歌は地上に生えてゐる竹である。更に比喩を代へて言へば、生活は鐘である。いつでも打てば鳴るべき鐘である。俳句や和歌は時々撞木が當つて鳴る其音である。さういふ意味に於て――生活即文藝と考へる點に於て――和歌や俳句の如き短詩形の文藝は長篇の小説、戯曲等よりもより以上に便宜な有力な詩形として存在してゐるものともいへるのである。更に實例について之を言ふと、芭蕉が若しあれで小説を作つたとして、其小説と芭蕉の生活とを併せ考へて得るところの芭蕉の文學と、

俳句と芭蕉の生活とを併せ考へて得るところの芭蕉の文學とは或は後者の方がより多く有力なものではあるまいかと考へらるゝのである。小説の方になると其泡は大きく竹の幹は太く、鐘の音は大きいけれども、どうも其爲に生活其ものが陰になりたがる弊がある。俳句になると泡は小さく竹の幹は細く鐘の音は小さいけれども、生活其ものは背景として遙に強大な力を有してをる。即ち小説や戯曲は小説や戯曲其ものが文學として力強い代りに、生活其ものは文學としての力を弱める。之に反して和歌や俳句は和歌や俳句其ものは文學として力が弱いが、生活其ものを文學とする點に於ては却つてより多くの力を持つて

をる。此處が私は特に短詩形の文藝について注意すべき點だと考へるのである。

其處で私は斯ういふ結論に達する。私等は單に俳句や和歌の作者ではない、私等は私の生活の作者である。俳句や和歌は畢竟其生活の處處に挿まれてをる記錄の短文字に過ぎない。我等は日々の日記帳に不文の生活を記錄しつゝある。さうして處々に目にとまる文字を以て其記錄の一斷片として和歌や俳句を記錄するに止まるのである。さればは我等の和歌や俳句は駄作よりも傑作であることを望むのはいふ迄もないことであるが、其よりも寧ろ生活其ものが傑作である事を望まなけ

ればならぬのである。生活其ものが傑作であれば大概な和歌や俳句は其背景の上に立つて相當の光を保つのである。此地で有名な以南や良寛にしてからが彼の和歌や俳句は必ずしも和歌や俳句として第一流のものといふ事は出來ぬかも知れぬ。けれども其等を彼等の特殊な生活の記錄の一片として見る時は、我等は其處に一つの大きな尊敬を拂はねばならぬのである。私は斯る意味に於て諸君等も試みに句作をして見らるゝことをお勸め申すのである。生活の記錄——さういふ言葉のうちに俳句の最も專門的な意味と最も普通的な意味とが同時に含こまれてゐるやうに考へられるのである。

私は斯んな意味の事を喋つた。其あとで烏啼君も一つの講演を試みた。散會してから表に出ると、銀河は佐渡の方に横はらずに町の上を流れてゐた。

俳句と自分 終

大正四年三月十六日印刷
大正四年三月二十日發行
大正四年三月廿五日再版
大正四年四月廿五日三版

定價四十錢

著者 高濱虛子

發行者 東京市京橋區南紺屋町十二番地 增田義一

印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 笠間音次

東京市京橋區南紺屋町十二番地
發行所 實業之日本社
電話京八七四、八七五、八七六、九八九
振替貯金口座東京三二六

東洋印刷株式會社 印刷所

俳句と自分
不許複製

高濱虛子 著

俳句とはどんなものか

九版

■定價四拾錢
■郵稅四錢
■裝幀優美
■中版美本

一口に俳句と言ふが、それでは俳句とは眞にどんなものかと問はれて、之に卽答し得る人は極めて少ない。又世間には自分は俳句を作つて見たいが、作りやうを知らないから困ると言ふ人が澤山ある。我が俳壇の驍將虛子先生は甚だ之を遺憾となし、自分が幼少の時から俳句に志し、遂に今日隨一の大家となるに至つた慘澹たる苦心と經驗と研究とを基礎として、極めて懇切に俳句の何んなものなるかを說き、又その作りやうを述べられたのが卽ち此の二書である。虛子先生は自ら斯う言つて居られる。近來は平易に言つて濟むことなさも

先生好著

俳句の作りやう

五版

■定價四拾錢
■郵稅四錢
■裝幀優美
■中版美本

難かしさうに說くことが流行る。だから初學者は其の去就に迷ひ、或は邪路に陷るのだ。自分は斯ういふことは嫌だ。高遠な眞理や難解の方法をば婦女老幼にも判るやうに、極く平易に述べたと。以て本書の內容を知ることが出來よう。されば全く俳句を知らぬ人でも本書に依つて俳句の妙趣を會得し、無量の感興を譯なく十七字に表はすことが出來るやうになり、又從來俳句を作つてゐた人も、本書に依つて益々啓發され、益々趣味を豐富にすることが出來る。此の意味に於て本書は「俳句の入門」であると同時に、「俳句の大學」である。

鳴雪俳句鈔

内藤鳴雪翁著

中村不折
下山爲山
兩畫伯畫

我が俳界の巨擘内藤鳴雪先生の句は世上既に定評あり。又喋々するを要せず。目下全國有力なる新聞雑誌の俳壇選評は、悉く先生の手を煩はしつゝあり。以て先生の俳風が如何に全國作家崇拜の焦點たるかを信ずるに足る。今や我が俳界は互に其の流派を競ひ、其の主張を爭ひ、却つて句作に疎かならんとする傾向あるの時、先生は獨り時流に超越して悠々風流を娯み、句作に耽けらる。先生又詩を良くす。賦して曰く、

偶吐奇言驚四筵
風流六十有餘年
呼來鳴雪人皆識
休說俳諧不抵錢

と。以て俳句に對する先生の抱負を窺ふべし。先生身を俳界に投じて句を吐くこと幾萬、今其の秀を選び、其の萃を抜きて本書を著す。納むる處の句々凡て先生會心の作たらずんば非ず。而して先生の句集として世上に行はるゝもの唯本書あるのみ。苟くも俳道に志す者は須らく本書を挑へて可なり。

■定價三十五錢
■郵稅六錢
■三五版
■美本全一册

71
548

終